

会 報

TUWV OB会 No. 39 2008. 12. 10

会費振込先 みずほ銀行川崎支店東北大学ワンダーフォーゲルOB会 普通口座(370-1881604)

ホームページ http://www.geocities.jp/tohoku_univ_wv_ob/

メールアドレスを変更された方は利根川さんに連絡して下さい: GWT00287@biglobe.ne.jp

TUWV 50周年記念行事を終えて

TUWV 50 実行委員長 3期(昭和39年卒) 後藤 龍男

10月4日に開催されたTUWV 50周年記念行事は成功裏に終わりました。実行委員長を努めさせて頂いた立場としてほっとしています。プランを進めている最中も、そこそこの盛り上がりは期待していましたが、これほどの大成功になるとは正直思っていませんでした。50も年齢差がある老若男女220名が一堂に会し、楽しく和気藹々と旧交を温められたのは、“同じ釜(飯盒)の飯を食べた仲間”故でしょうか。ご参加頂いた方々のご協力に感謝します。これからも適宜こういう集まりや行事が続けられたらと念じています。



OB会の盛況に反し、今回の行事を通じて気になったことは、やはり現役部員の少なさです。川内の部室を訪問したとき、壁に貼ってある部員表を見ると、3年生はわずか一人でした。つまりこの年この1名が入部しなければあわや廃部の危機にあったと言うことです。以前ある大学の山岳部に在席し、ヒマラヤ遠征で鳴らした知人が嘆いていましたが、彼がいた山岳部は現在部員わずか3名、そのうちの一人は外国人学生だということです。この傾向はほとんどの大学山岳部やワンダーフォーゲル部に共通することで、東北大に限らず、若い学生達の登山やアウトドアスポーツ離れが進んでいるようです。我々の頃と違い、インターネットやゲームなど、ほかにインドアの楽しみがいくらかもある豊かな時代なので仕方ないのかも知れませんが、若者の冒険心や自然に対する興味が薄れていることは大いに気懸かりです。最近繰り広げられている大学の独立法人化などと同じく、手軽さと効率ばかりを追い求める世相を反映しているのかも知れません。OB諸兄のご賛同を得て、集まった会費のうちから幾ばくかの予算を捻出し、現役諸君達にささやかな寄付をさせて頂きました。是非これからのより充実したTUWV活動に活用して貰いたいものです。

祝賀会の最中、はや60周年記念の話が出ていました。10年後にも実現されたときは、きちんと自分の足で歩いて参加出来るよう、今から心懸けようと思っています。

来年1月、新橋亭OB会での皆様との再会を楽しみにしています。

副実行委員長を担当して

TUWV 50 副実行委員長 4期(昭和40年卒) 平塚 征英

TUWV創立50周年計画に関する私の最初の文書は、奇しくも日付が昨年の10月3日で、本チャンの10月4日5日の丁度一年前でした。夏に3期先輩が来仙し、“50周年をやるぞ!”と言われ、5期瀬尾さんがまとめたものを編集し、同期の関川の来仙時に相談した時の資料です。この頃には既

にネットで福井大学WV部や広島大学WV部の創立50周年事業の事を調べていたようです。結局は新橋亭新年会で私が説明すべく、同期の小原がOB会長らしいので、相談することになった。

在仙中の16年間はもとより、在京時代も新橋亭新年会には参加したことはなく、当日は店を歩き過ぎてしまい場所を探すのにも苦労したような始末でした。

○ 実行委員の役割分担

1月25日新橋亭新年会において、後藤実行委員長ほか数名が実行委員に指名され、その後のメールやりとり、会議等によってメンバーの追加と役割分担が決定されました。

【統括】後藤、平塚【祝賀会】佐藤(敦)、青木、真尾【記念登山】瀬尾、桜、桃谷

【記念企画】小原【会計】伊田、利根川【コミュニケーション】利根川【記録】渡辺

【若手支援】多田、草野、曾我、原田、生野、大窪【OB会事務局】佐藤(拓)

○ 連絡と会議

実行委員間の連絡はメールで行うことになり、25日以後は戸惑う程のメールが飛び交いました。真尾委員から、“酒のない席で早急な打合せ”の提案があり、仙台第1回実行委員会は新橋亭一週間後の2月1日に開かれました。瀬尾委員からは、“委員会終了後には何か予定ありや？”との質問があり、“ハナキンでもあるし、大役を果たした？後だから、何かやろう！”との事で、会議後の会食(学割あり)が定例化し、今では死語となったノミネーションが非常に有効だったと考えています。

東京では、2月18日に利根川委員の東京出張にあわせて第1回会議が開かれ、仙台会議の資料を基に討議が行われ、創立50周年記念行事の基本的な方針が定まりました。

仙台での会議はそれぞれの節目毎に、第2回(6/19)、第3回合同(7/27、小原・青木委員来仙)、第4回(9/16事前最終)、第5回(10/21事後反省)、第6回(11/27記念品贈呈式)と言う具合に、会議後の楽しみの方が強い人が多かったせいか、良く集まりました。

メールのタイトルから委員の間で討議した主な事項をピックアップしてみました。色々ありました。

- ・ 創立50周年はいつやるか、2008か2010か？
- ・ 「報告」の電子化、記念企画「写真披露」と「50年の歩み」
- ・ 祝賀会のあり方。ざくばらんな会・式典色。会費どうする。
- ・ 記念品贈呈…一番モメましたね。

○ 案内

OB会員の皆さまへの案内は、最終的には3月、8月、9月の3回行いました。メールアドレスの整備を始めとし、一斉配信は全て利根川さんにやって頂きました。特に8月の第2回案内は、会費納入が主目的でしたので、しつこい位の督促もあった(と同期の誰かが言っていました)ので、開催期日前までに会費納入を完了出来ました。

○ 記念祝賀会と記念登山

これについては、皆さまご存じのように、いずれも大盛況で“非常に良かった”と皆さまからメールを頂いております。直接担当された真尾委員と瀬尾委員の報告を参照下さい。

○ 記念品贈呈

私は計画の当初から、50周年記念行事の記念企画として記念品贈呈を行う事を考えておりました。これは福井大学WV部HPの影響が大きかった事もありますが、若い人が困っているなら援助してやろうと単純に考えていました。途中で委員の間で意見の相違もありましたが、最終的には現役に喜んで貰えるような贈呈が出来て良かったと思っており、実行委員の皆さまと参加者皆さまに感謝致しております。

11月27日には、山用品のサンライフ*2階において、記念品贈呈式と称して、副委員長から現役の大窪新主将に現物の贈呈を行いました。その後は定例となったトンチャン白頭山での慰労会でしたが、初参加の現役も多く、今のワングル活動が、如何に金が掛かるかを知らされた次第です。(残念ながら、サンライフは来年1月末をもって店じまいだそうです)

○ 記念企画

部誌「報告」の電子化については、今回の計



画より前に提案があったようですが、紆余曲折はあったものの、小原委員の指示のもとに、特に伊田委員ほかの手弁当により欠号以外は全てpdf化が完成し、現役HPで閲覧できる状態が実現できました。せっかく電子化したのですから、現役を初めとする皆さまの積極的な活用を期待します。

○ おわりに

今回の実行委員会では、若手委員と一緒に討議して計画を進められたこと、現役との交流が出来たことが、私個人として最も大きな収穫だったと考えています。若い人から、“最も苦勞した人が、最も満足感が得られる”などと言われ、その気になってしまったのも良い思い出となりました。

仙台では、3月には新卒業生のOBとしての歓迎会が定例化しております。この他に5年ほど前から、仙台シニアOB会と称して、3期から8期位の連中が忘年会とか新年会をやっておりました。

今回の新旧の交流を機会に、シニアの名称を外して皆さんが参加できる仙台OB会が暮れや正月に開催できるようになれば良いと考えております。

TUWV 50周年記念祝賀会を担当して

TUWV 50実行委員 7期（昭和43年卒）真尾 征雄

【どのような記念祝賀会にするか】 2月1日の仙台での実行委員会で、平塚征英副委員長（4期）が示した記念行事の全体像をたたき台に討議し、どのような記念祝賀会にするか共通の認識ができた。

- ① 参加者同士のコミュニケーションを図れるようにする。
- ② 会費を1万円におさえ、大勢の方が参加しやすくする。
- ③ 50周年の記念として、思い出に残るものとする。
- ④ 青春時代を過した懐かしい仙台での開催に相応しい会とする。

【規模と形式】 当初参加者数を100名と想定して会場選びをし、ホテル白萩を予約した。メールで出欠を打診したところ4月21日には推定180名となり、さらに増える可能性もあるので着席で210名収容可能な仙台サンプラザに変更。最終的に220名の参加者となることで、高齢の方には着席で若い方には立食とする折衷方式とした。結果論であるが、折衷方式は一体感をもたらすことと、コミュニケーションを図る上でよかった。

利根川敏委員（22期）が部員のメールアドレスを早急に整備し、参加者数を早く掴めたおかげで、祝賀会の企画がスムーズにできた。

【式次第とタイムスケジュール】 16時の受付開始から20:30の中締めまで、ほぼ計画通り進むことが出来た。会費を事前振込みにしたこと、個人の席次や撮影時間等必要な情報を記入した名札を渡したこと、カメラ係の事前準備と青木祐二委員（6期）の手際よい進行が大きな要因であろう。ご歓談の途中にスピーチを入れたが、残念ながら私語が多かった。もう一工夫すべきであった。最後に当初の予定にはなかった全員での記念写真撮影を行なったが、雰囲気がよく出ており良かった。

【配布資料】 参加者がTUWV50周年記念の思い出に残るものをと小冊子にまとめて配布した。50年の歴史が凝縮しており、世代により部員数も山行スタイルも変わってきていることがわかり、コミュニケーションを図る上でも大いに役立った。多田忠義委員（45期）の奮闘によるところが大きい。

【会場と費用】 会場を仙台サンプラザで行なったが、2つのホールを控室として無料で借りられたので、開場前の談笑や映像やアルバム閲覧等非常に役立った。

宮城県の日本酒と牛タンや芋煮等仙台に相応しい料理を用意したが、日本酒は大量追加、料理も追加注文をするほどであった。美味しく飲んで食べていただき良かった。

【アトラクション等】 渡辺勝宏先輩（2期）による「くずらんこ」には、知っている人には学生時代を思い出し、はじめて聞く人にはびっくりして、全員が大笑いした。最後に全員が円陣を組んで、現役生野達也主将（48期）の指揮で学生歌・部歌を斉唱した時、1期生から51期生まで参加者全員が一つになった。時代によっていろいろ変わっても、TUWVの精神は変わらぬ思いがした。

【記念品贈呈】 多くの方々が参加いただいたおかげで、コスト面で余裕が出来た。今の現役は部員数が少ないため部費が少なく、装備品の購入にも苦労しているとの事であった。後藤龍男委員長（3期）が出席者の賛同を得て、テントと火器（総額 220,730 円）を贈呈した。

現役にはOBの熱い思いを受け止めて、活動を活性化させ、いつまでも存続させて欲しい。



TUWV創部50周年記念登山報告

TUWV 50 実行委員 5 期（昭和 41 年卒）瀬尾 勝之

我々仙台住在のワンゲルOBで、4期の平塚先輩が中心となって“シニアの会”を結成し、新年会・忘年会や3月の新OBの歓迎会参加等で親睦を深めているが、今年1月末の新橋亭OB会（東京）に参加した平塚先輩から50年式典の開催日と開催地の他、各イベント担当の実行委員まで決まったとの連絡を受けた。また小生の担当は「記念登山」の実行委員との事。さすがワンゲルの行動力、「やる事が早い！！」と感心した次第。なお、記念登山の実行委員は小生の他、櫻洋一郎氏（5期）と桃谷尚安氏（9期）の3名である。

当初、仙台シニアの会では、昭和36年4月発行の部誌「報告」3号に、昭和35年（1960年）6月2日を以って「この日を創立記念日とする事」と明記されていたので、式典は2年後と想定していた。したがって小生は多少は慌てたが、日時や場所等の基本的な事項は決定しており「後は実行あるのみ」で気は楽である。この基本形式を基に早速行動開始。スキーシーズンたけなわの2月中旬に先ずは最初の現地状況の視察を行った。

この時点での問題点は、①参加人数。②当日の天候。③費用。等である。この3点は現地までの交通手段や記念セレモニーの内容に影響するからである。当初は、参加人数予測はせいぜい70名程度と想定し、イベントも単に山麓～頂上までのピストンではつまらない。泉ヶ岳は仙台市民の憩いの場所であり、規模的にはチンケな山ではあるが、我々ワンゲル部員にとっては毎年この地でテントを設営し「新歓合宿」に始まり「最終合宿」に終る神聖なる思い出の山なのである。そこで記念となるイベントは、参加者全員が集合して飲食しながら歓談するスタイルを基本として、当日の天候や事前の準備作業にも配慮し山麓にある民営ロッジに交渉して2階のレストランに場所を確保し、エッセンは仙台名物芋煮鍋とした。また交通手段も、定期路線バスでは出発が地下鉄泉中央駅となり集合に不便なので、貸切バスをチャーターする事とした。人数次第では路線バスよりも割安である。

さて、主催者としては肝心の参加者数があまりにも少人数であれば盛り上がりには掛けるので多くの参加を期待したが、3月の第1次募集で、なんと参加者は130名以上となり正直言って驚いた。予想の倍である。逆にプレッシャーも掛かった。

6月の第2回仙台実行委員会で“50周年記念登山（瀬尾私案。VERSION①）”を提示した。実行委員会における協議事項は当然の事ながら、前日の記念式典が主体となるので、記念登山に関してはあまり細かい意見は無かったが、各委員からの提案も加味して本案を基本に実行する事となった。その後、ロッジや市バスとの数度の交渉や打合せを実施し、式典当日参加者に配布された計画書の通りとなった次第である。

当日はブツケ本番とはなるが、基本的には他の登山客には十分配慮すべしとして、①登山のプロ集団としてマナーを重視する事。②TUWVと分る様に名札を付ける。③可能な部員はTUWVの部章ワッペンが付いた旧制服の着用する。等である。

さて、10月4日(土)記念式典開催日当日の早朝に泉ヶ岳ロッジに行き、支配人と最後の打合せを実施し、最終参加人数、芋煮鍋の材料や、飲み物の数、スケジュール等および、予算や支払い方法の再確認を行った。また、小生自作の幅3mの横断幕を、明日9時の集合時間までに広場に掲げる様に依頼した。帰路の途中で市バスの実沢営業所に立ち寄り、バス発着時刻や場所、ドライバーの氏名と携帯を確認し、2台分の支払いも済ませた。

これで、後は明日の本番を待つのみで、午後は式典会場に向った。会場では素晴らしい計画書が出来上がっていて、記念登山の企画も事前の打合せ通りに詳細に記載されており、これがあればブツケ本番でも問題はないと確信した。

さて、前日の記念式典の興奮も覚めやらぬ5日早朝、天候はまずまずの曇り空。集合1時間前に仙台駅西のバス乗り場に行ったが、さすがにまだ誰も居ない。30分も過ぎた頃、三々五々集まってきた。皆さん前日は遅くまで飲んでいた様子で、目はトロンとしていたが、体調は良さそうだ。バスはほぼ予定通り仙台駅前を発つ。バスの中では昨夜の2次会など、思い思いの話題で盛り上がり9時前にロッジに到着。すでに自家用車組が集合しており、お互いに横断幕とゲレンデを背景に写真撮影などをしていった。

参加者はドタキャンもあって予定より少なく約120名となったが、計画通りに年代別に15班編成で整列し、班毎にパーティーリーダーを選定した。9時15分の記念登山実行委員の櫻氏(5期)の挨拶で始まり、幹事からのガイダンスの後、参加者全員で山を背にして集合写真を撮影。現役部員で編成する本部先発隊を先頭に年次毎に1班から頂上又は水神を目指して順次出発した。

小生は、現地本部としてロッジに残り、14時から開始するセレモニー会場の準備を整えながら、本部先発隊、中間隊、後発隊(共に現役部員)との無線連絡を聴きながら、各班の登山行動状況を把握した。12時半過ぎに山頂の後発隊から最終組出発の連絡が入り、ほぼ予定の時間通りで先ずは14時のセレモニーには間に合いそうで安心した。

13時過ぎには平塚副実行委員長の率いる水神コースが到着し、まもなく山頂コース隊も次々と下山し、14時前に無事最終組が到着。最初は整然と隊列を組んで出発したが、現役時代とは違って、到着時に隊列が整って下山したのは若手の2~3パーティーで、他は市民マラソンのゴールの様に、隊列も乱れバラバラに下山して来たのは年のせいかな? 記念セレモニーが始まる14時頃には小雨がパラツキ始めたが全員無事で先ずは安堵した。

記念登山のセレモニーは後藤委員長の挨拶で始まり、メインイベントの芋煮鍋を肴に祝宴の開始である。普通はここで「乾杯の発声」となる所ではあるが、グロッパチならぬ芋煮の入ったどんぶりを前に、昔懐かし「ご飯だご飯だ、さあたべよ〜」を合唱して始まった。この「ご飯の唄」は、部員数が多く数パーティーの編成が可能であった時代の遺物であり、10期生までしか経験が無いらしいので、リードは記念登山実行委員の桃谷氏(9期)にお願いした。参加者の殆どは卒業以来か、または初めて唄う歌であろう。

メインディッシュの芋煮鍋は、参加人数よりもかなり多めに芋と肉を用意したつもりであるが、最初の盛付けが片寄ったせいか野菜と汁ばかりの人も居た様で、クレームが付いたのは幹事としては大



変申し訳なかった。式典の途中で、佐藤拓哉OB会幹事長の事務連絡の他は、各年次の方々からもスピーチを頂く予定ではあったが、前日の式典同様に各テーブルでの雑談で盛り上がっていたために、これは中止した。最後に、現役部員の生野主将の音頭で部歌（放浪の歌）を合唱し、平塚副委員長の締めの挨拶で修了となった。

会場の後方付けを現役部員にお願いして会場を後にした。外は小雨模様であったが仙台駅行きのバスも手配通り広場に到着しており、全員無事に帰路についた。

帰りのバスの中で、思わず“雪山賛歌”の最後のフレーズ「山よサヨナラご機嫌よろしゅ〜」が口に出たが、この歌を口ずさむのは何年振りであろうか。

なお、セレモニーの挨拶の中で後藤実行委員長が「今回は60周年」との発言があった。ワングル発祥のドイツには馴染まない習慣だろうが、我が国で60年とは「還暦」と言う重要な節目である。この50周年の実績と反省を基にして、若い後輩達を中心となって是非実現して貰いたい。小生現在66歳、老後の楽しみにしている。

TUWV 50周年記念行事を無事終了して（コミュニケーション・会計）

TUWV 50 実行委員 22期（昭和58年卒）利根川 敏

TUWV 50周年の記念行事が多くの方々のご協力で大成功のうちに終了でき、私自身も本当にひと安心しています。写真発送や最後の会計処理がまだ残っていますが、自宅宛てに届く電子メールは1日に数件と、やっと普通の生活に戻ることができました。

平成19年の新年会で50周年記念行事の事が話題になった時点で、平成20年は自分の時間が持てなくなる大変な年になるだろうとの覚悟はできていました。今年の新年会で記念行事の実施が決まり、電子メールを通じた皆様との連絡やご案内、会計などを担当させて頂きました。

覚悟が出来ていた事とはいえ、500名以上の方々の名簿管理に始まり実行計画書の作成など、一斉案内をすればそれなりの問い合わせやお礼のメールが毎日山のように自宅（+職場）へ届きます。また、会費納入が事前振込になったため、参加メニューに沿った入金確認（記帳）と参加者名簿作成、入金確認のお礼メール送付など、2月～9月までの8か月間は、本当に「だれか代わって〜」と思う日々の連続でした。

今だから申し上げられる事ですが、（私にも20年以上連れ添った愛妻と子供達がおりますので）、家族のゴールデンタイムに私がパソコンに向かってばかりいることが、家庭生活にもかなり影響しました。実は昨年（平成19年）にも同様の前科があり、（東北大学創立100周年で、3つの研究室の合同同窓会の代表幹事を仰せつかり）、2年連続で家族のゴールデンタイムがほとんど無い生活に、家族からは「皆さんのお世話をするのはあなたの趣味なのだから、あきらめるしかないわね．．．」とも言われていました。

振り返ってみると、年間100日以上出張や会社の研究企画業務、仙台勤務による東北大学連携や宮城県対応など、目まぐるしい業務をこなしながらの対応になりました。会社のパソコンからTUWVの連絡に急ぎの返信をした事が何度もありました。この様な状況でしたので、ここ数日電子メールを頂かない平和な日々には、本当にほっとしています。次回のビッグイベントはTUWV創立60周年と10年後、今後9年間は普通の生活に戻れると思います。

最後に、電子メール管理人としてのお願いです。メールアドレスを変更された場合には、「GWT00287@biglobe.ne.jp 利根川」まで、ご一報下さい。宛先不明で戻ったメールは、申し訳ありませんが学年毎の「連絡代表者」へ転送いたします。お仲間の連絡先検索と皆様のコミュニケーションネットワークの維持管理に、今後ともご支援下さい。よろしく願いいたします。



記念祝賀会にて

最近のワングルの活動

TUWV 50 実行委員 48期 (現役) 生野 達也

東北大学薬学部総合薬学科薬理学分野4年、TUWV元主将の生野です。時間の流れは早いもので、もうすぐワングルOBになります。現役時代は(といってもまだ現役なのですが、若くてまだ体力があり、バリバリ活動していた頃はとらえてください) 藪を中心に縦走はもちろんのこと、ボート、無人島と幅広く活動しておりました。唯一の心残りは冬山、沢といった形態をあまり体験できなかったことです。OBになり、もし機会があれば、ぜひそちらの方にも足を伸ばしてみたいと考えております。

さて、今年度のワングルの活動はといいますと、1次、2次新人訓練合宿(面白山山塊)はもちろんなのですが、夏合宿で知床半島縦断、秋合宿で南アルプス縦断(荒川岳～赤石岳～聖岳)といった山行が出ました。中でも知床半島の先端部にある灯台は、一般の人には行くことができない(港があるので海から上陸することはできるが、普通の観光船はその港に止まらないため海からしか眺めることができない)秘境中の秘境であり、実際に苦労して灯台に着いた時、今の1～3年生はすごく感動したそうです。しかし、残念ながら今年はまだ灯台の補修工事が入っており、工事関係のおっちゃんが普通にいたそうですが、あえて見なかったことにしたそうです。また、秋合宿に関してはお金のない人の集まりであるワングルでは珍しく(少なくとも私は経験したことがないのですが) 有人小屋に1泊するといった経験もしてみたいです。食事はかなりおいしかったらしく、いつも自分たちで作った固いご飯を食べていた私としてはかなりうらやましく感じました。いつかお金にものを言わせた山行もしてみたいものです。できるのはいつになるか分かりませんが・・・

残念ながら秋のフリー期間(10月～11月中旬)に今年山行が出ず、むしろ現役よりOBの方が山に行っているといった状況になってしまいました。みなさんいろいろと予定があるみたいで・・・ただ計画を出していない自分が言うのもなんですが、たまには下界のことを忘れて山でリフレッシュするのも気持ちいいと思うのですがねえ。

今年度の活動における写真及び報告、また前年度までの活動写真等は随時現役HP (http://www.geocities.jp/tuwv_now/)にて公開していきますのでご期待ください。最近滞っていますが06' 秋合宿八ヶ岳P及び07' 夏合宿無人島Pにつきましては報告をつい先日書かせていただきましたので、近日中にUPされると思います。ではこれからもワングルをよろしくお願いします。

最近のTUWVの活動と学生気質

ワンダーフォーゲル部・部長 16期 (昭和52年卒) 植松 康 (16期)

[最近の学生] 私がワンダーフォーゲル部と直接関わるようになったのは副部長に就任した16年程前からです。その後2003年4月から部長を務めさせて頂いています。ちょうどその年の7月に「国立大学法人法」が制定され、「国立大学法人東北大学」となりました。これに伴い、大学における安全管理が厳しく問われるようになり、課外活動における事故防止と事故発生後の対処方法について大学上層部からしばしばお達しがありました。ワンダーフォーゲル部は他の運動部に比べて事故発生の可能性が高く、もし不注意で大きな事故でも起きようものなら部長としての管理責任が問われかねません。しかし、危険だからこそ十分な企画検討を行い、山行中も慎重な行動をとるよう学生に心がけて貰っています。その甲斐あって、これまで大きな事故は起きていません。

自分が現役部員だった頃のことを考えてみますと、二次新が終わった後の新歓コンパ(「三次新」と称していました)では、毎年一人や二人は救急車のお世話になったものでした。結構無茶なことをやっていました。今、学生があんなことをやったら、きっと私の首は繋がっていないことでしょう。幸い、この頃の学生は後輩にお酒を強要することはありませんし、酔っ払いは格好悪いことと考えているようで、年に二度行われる総会や卒業式でも安心して一緒にいられます。その意味では、昔に比べて随分大人になったと思います。

【大学でのクラブ活動】 「大学は学問をする所であるからクラブ活動なんて不要」という極論を唱える教授もいますが、クラブ活動(特に、学友会の運動部)は人間形成の上で極めて重要であると思っ
ています。「健全な肉体に健全な魂が宿る」と言われます。大学時代のクラブ活動を通して、体力、
忍耐力、集中力、協調性が培われ、その後の長い人生を過ごす上で大きな武器になることは間違いあ
りません。毎年、数名の進入部員が入ってきますが、前期総会の時、「4年間続け、私から卒業証書
を受け取って欲しい」と進入部員に毎年必ず言っています。その甲斐あってか、退部者率(入部者数
に対する退部者数の割合)はそれほど高くはないようです。しかし、分母となる入部者数が最近少
なくなってしまったことが残念です。練習は週二回、参加は自由、しかも、宮城学院と一緒に、とい
った楽で楽しげなサークルが数え切れない位あり、そちらへ流れてしまう学生が非常に多いのです。
気骨のある学生が減ってしまったのは残念です。何が悪いのでしょうか。

私の研究室にはどういう訳か、体育会系の学生が多く入ってきます。残念ながらワンダーフォー
ゲル部の学生はいませんが、ボート部、アメフト部、陸上部等々。毎日のように練習があるので、普
段の成績は決してよくはありません。しかし、私はそんなことは全然気にしていません。クラブ活動
を一生懸命やっている学生は、やる時にはちゃんとやります。大学院に進んだ時には、自ら進んで研
究をします。

【TUWVの最近の活動】 新歓、第1次および第2次新練、旧練と続き、夏合宿に向けたプレ合宿が
2~3回、夏合宿、秋合宿というのが、最近の一般的な合宿パターンです。私が現役の頃と比較すると、
春合宿はなく、訓練合宿が終わるとすぐに夏合宿のメンバーでプレ合宿に入ります。また、最終合
宿は行っていません。過去約2年間の合宿の様子を示しますと以下のようです。

2006年秋合宿：八ヶ岳(縦走)

2007年夏合宿：西表島(沢)と無人島(自給自足の生活)、2007年秋合宿：北アルプス(縦走)、

2008年夏合宿：知床(藪)、2008年秋合宿：南アルプス(縦走)

以前からよく行われてきた縦走に加えて、藪や沢の割合が最近では増えています。上述しましたよ
うに、部員数が1学年数名ですので、1パーティか2パーティしか組めないのが実情です。

このような合宿のほか、フリー山行も沢山出しています。藪や沢に加えて冬山にも出かけていま
す。最近では、2007年夏合宿の「無人島」のように、一風かわった合宿もあります。上越の藪の後青春
18切符を使って四国に渡り、四万十川の川下りをやったり、仙台から月山の麓までサイクリング、月
山に登った後またサイクリングで仙台に戻るといった企画など、ユニークなワンデリングがあり、
時々驚かされます。

【TUWVの輪】 先日の創部50周年記念パーティには全卒業生の約40%に当たる約220名もの方にお
集まり頂きました。この高い出席率を他の人に話すと、口を揃えて「信じられない」と言います。こ
れが文字通り「同じ釜の飯を食べた」TUWVの輪だと思えます。記念行事には現役部員も全員出席し、
OB、OGの皆様から様々なお話を伺うことができた皆大変喜んでいました。私は、総会時など、学生
に「就職の時、仕事で困った時には、ワングルのOB、OGに遠慮なく相談しなさい。仮に面識がなく
てもワングル部員あるいは卒業生だと言えば、親身になって相談にのってくれるはず。」といつも言
っています。それが決して間違いではなかったと確信しました。現役部員とOB、OGの輪をもっと大き
く広げることができればと期待しています。

わたしのワングル時代

ワンダーフォーゲル部・前部長 5期(昭和41年卒) 吉田公平(東洋大学文学部)

ワンダーフォーゲル部が創立されてはや五十年。創設者たちは二十歳前後で思い立った訳であるか
ら、今や七十歳前後と云うことである。初代の部長であった鈴木禄弥先生は、その折は新進気鋭の教
授であったが、先年に長逝されたのもそのような年回りでもあったということである。

この五十年の内の四十五年が小生のワングル時代である。中学・高校時代は排球部に所属していた
ので、大学では別の部活をと考えていた。入学式の時にラグビー部から勧誘があったが、高校時代に

肝炎を患ったので、あまりに過激な部活は敬遠した。ワングルにはさしたる動機もなく何となく入部した。トレーニングは参加したが、熱心ではなかった。百姓の訓練を受けていたので、山歩きの為に訓練する必要を感じなかったからである。それでも部室に行くのは楽しかった。今思うと何を話していたのか。山歩きに必要な装備とか技術とかにはほとんど関心がなかった。企画にのって皆と歩いたというに過ぎない。それだけのことである。しかし、一人なら歩くこともなかったであろう山塊を巡ったことは、後に儒学者の故地を調査旅行する際に大いに役立つことになった。もう一つは学部・学問を超えた友達に恵まれたことであろう。所謂現役時代は四年間に過ぎない。それも、小生は一度退部することを考えた。先輩の忠告をいれて留まった。結果的にそれが良かった。勝ち負けを競う部活でなかったことが幸いしたのである。

卒業後は大学院に進み、九州大学の助手を皮切りに研究教育職を今日まで続けている。九州大学の助教授が急逝した後の後任に、教養部に在職していた先輩が赴任した。その後釜に配置換えになった。小生の教養部時代は十三年半に及ぶ。その後半に鈴木先生に請われて部長を引き継ぐことになった。OBだからこそ口出しはしないほうが良いという心構えであった。新米教師であり、研究者としては駆け出しであったので、そちらに忙殺されて熱心な部長ではなかった。赴任当初は学生処分問題で教養部が大揺れに揺れたが、部長就任の頃は落ち着いていた。父兄が乗りこんできたりしたこともあったが、大局としては平静な時代であった。ワングルの部活は、リーダーの役目が自然と養成される仕組みであったので、部長は殊更に気張る必要がなかったのである。と暢気なことを回顧する。

広島大学に赴任する途次、東京でOB会が開催された。それに参加し夕刻に新幹線に乗った。同期の連中が缶ビールとつまみをくれた。新任地は試練の連続であったが、時にワングルの仲間を思い起しては鋭気を奮い起こしたものである。十一年在職した。少し休息した後、今の東洋大学に赴任した。

毎年一月の新年会には皆勤である。皆に会えるのが楽しい。誰もが少しずつ年老いていくのが素敵である。ワングルだけではあるまいが、経済的な利益を追求する集団ではない組織に所属すると、浮世離れが出来るのが奇貨である。その意味では、卒業後の収穫が豊である。現役時代はそのための胤まきである。ワングルはもと渡り鳥と呼称した。こちらからあちらへ、あちらからこちらへと渡る鳥のことである。それは言い換えると、異文化体験をするということである。自らが出来る体験は些細なものだが、朋輩があればこれも吹聴してくれる。有難いことである。それぞれが自らの命を紡ぎながら隣の人と眼差しを交わしては、共になしみ（慈悲・慈愛）を分ちながらも、それを露わにすることをつつしんでそっとしまい込み、静に生きていくことの有り難さを感謝する。誰に感謝するのか。そのように生きることの出来る今のわたしをこの世に誕生させて育んだ家族と、今のわたしに仕上げた昔のわたしとその朋輩達とに。明日は嵐か、それとも晴れか。今日の一日が楽しかれ。

ワングル雑感—三代目部長を務めて—

ワンダーフォーゲル部・前部長 10期（昭和46年卒）野家 啓一

さる10月に開かれたワンダーフォーゲル部創立50周年記念の祝賀会には200名を超えるOB・OGが集まり、懐かしい面々にお目にかかれて本当に楽しい時間を過ごすことができました。まるで昔の部室の賑わいが再現されたかのような雰囲気、山仲間の絆の強さを改めて感じた次第です。多岐にわたる準備に犬馬の労をとられた実行委員会の皆様に対し、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

私が鈴木祿弥先生、吉田公平先生（第5期）の後を引き継ぎ、3代目の部長に就任したのは1987年10月のことです。たしかその年の夏に、祿弥先生の紫綬褒章受賞のお祝いの会が東京駅近くのホテルで開かれ、その席で「売り家と唐様で書く三代目」という川柳を引きながら、部長をお引き受けするに当たっての自戒の念を述べたことを覚えています。私としては数年間のワンポイント・リリーフのつもりでしたが、副部長を務められていた直江真一さん（第14期）が九州大学へ転出されたこともあり、結局は2003年3月まで足かけ16年の長きにわたって部長を務めたことには、自分でも驚いているところです。それでも、現部長の植松康さん（第16期）も現副部長の土屋範芳さん（第22期）もともにワングルOBですので、安心して後事を託すことができました。

部長になってまず驚いたのは、「メツチェン」（女子部員を意味するこの言葉も最近では死語になっており、「ワンダーフォーゲル」がドイツ語であることを知らない現役部員もいるようです）が一

人もいない状態が数年以上も続いていたことです。さいわい、白幡彩さん（第27期、現姓：神）が入部して伝統は復活しましたが、メッチェンの扱いを知らない男性部員にまじっての活動は、並大抵の苦勞ではなかったように思います。その意味で、ワングルメッチェンの中興の祖としての彼女の功績には大なるものがあります。また、その当時の主将を務めた平塚晶人さん（第27期）が現在は山岳ライターとして多方面の活躍をしているのも、私にとっては嬉しいことの一つです（彼のノンフィクション『二人のアキラ、美枝子の山』文芸春秋は力作ですので、ぜひご一読ください）。

もう一つ驚かされたのは、ワングルの活動形態が私たちの頃とは大きく様変わりしていたことです。合宿に沢登りが取り入れられ、装備もキスリングからミレーザックに変化するとともに、夏合宿の山行地域も北は日高や知床から南は石垣島まで全国に広がっておりました。そのため、夏合宿の開会式で部員たちを励まして送り出してから、全員無事下山の報告が在仙本部から入るまでの二週間ほどは、台風の位置や前線の配置など毎日の天気予報に気が揉めて仕方がなかったことが思い出されます。祿弥先生や公平先生のご苦勞が思いやられたことでした。それでも、沢登りの途中で骨折などの事故はあったものの、この50年間に人身事故が1件もなかったことは、クラブとして誇ってよいことだと思います。

少々残念であったのは、1990年代の終わりごろから部員数が二桁を割りはじめ、時には2～3人にまで減少したことです。キャンプファイアーを囲むにも円陣が組めないという状況には、いささか寂しいものがあります。これには学生気質の変化が大きく関係しており、3Kと呼ばれる学友会の運動部よりは規律や訓練のゆるやかな同好会の方を好む傾向が、それに拍車をかけています。最近では山に登っても若者の姿は見えず、出会うのは中高年ばかりとなりましたが、現役部員の皆様にはぜひ新入生に山登りの楽しさと素晴らしさを伝えていただき、せめて二桁の部員を確保してくださるよう期待いたします。

最後に、私が三代目の部長を16年にわたって無事務めることができましたのも、現役部員の奮闘とOB諸姉兄のご支援があつてのことです。ここに心より感謝申し上げますとともに、10年後に東北大学ワングルの還暦祝いに再び集まることができますよう、現役諸君の一層の活躍とOBの皆様方のご健勝をお祈りいたします。

ワングル立ち上げの頃

1期（昭和37年卒）加藤 哲男

〔ワングルの立ち上げ〕 東北大に初めてワングルが誕生したのは、**昭和32年**と記憶しております。今回ここに来る前に、東北大にはじめてワングルを立ち上げてくれた先輩の一人、北川泰正さんに手紙とメールで、当時のいきさつを確認しましたが、私の記憶に間違いなく、私が東北大に入学した昭和33年の前の年、**昭和32年（1957年）に東北大ワングル同好会が設立**されています。

当初、実績が全くないため、学友会のクラブ（部）として認められず、同好会からの出発ということで、ともかく東北大にワングルが誕生しました。

同好会が出来たもう一つの契機に、東北学生ワンダーフォーゲル連盟の設立の動きがあつたとのことでした。連盟は、東北大、東北学院大、福島大学、岩手大学で構成され、北川先輩は、東北大のワングル同好会の設立と併せ、連盟設立にも努力されとのことでした。また連盟設立に際しては、登山部系とハイキング系の路線対立があつたという話を聞いております。

〔同好会から部昇格へ〕 次に、**何故ワングルが同好会から部に昇格できたのか**について話してみたいと思います。同好会では、何しろ金も備品もなく、もちろん部室もなく、山行きの計画を立てたら、そのつど同行の仲間を集め、備品を借りて出かけなければなりませんでした。

何とか備品の一つでも手に入れる手段がないかと日ごろ考えていたところ、学友会の体育部に昇格できれば、わずかだが予算もまわってくるということに気づきました。そこでワングル同好会も3年になり、常連会員もそこそこ集まり、活動実績もそれなりに積み重なってきていたので、早速、学友会体育部に部昇格の申し入れに行きました。ところが、既存の部は“ハイではすぐ入れてあげまし

よう”とは言ってくれませんでした。当時の学友会の会長は、確かバトミントン部キャプテン鈴木さんという人だったと思いますが、彼が、それならともかく会議に出てきて、皆さんに直接お願いしろと言ってくれました。そこで確か私と同じ法学部の倉持君だったと思いますが、会議に出席し学友会の皆さんに部昇格のお願いをしました。しかし、やはり、皆さんは簡単にウンと言ってくれませんでした。最後に、鈴木さんが、“そんなこと言わずに入れてやれや”との一言があり、辛くも部昇格が果たせたとするのが、部昇格のいきさつです。

【鈴木禄弥先生に部長就任をお願いしたいいきさつ】 部への昇格が決まり、学友会の体育部の部になると、担当教官の部長就任が必要になります。そこで部長を誰にお願いしようかということになりました。私は法学部の学生で、法学部以外の先生は全く存じ上げませんでしたので、まず法学部の先生に目をつけました。若い先生でワングルの部長になってくれそうな人と言うことで、国際法の小田滋先生、政治学の宮田先生の名が上がりました。小田先生は、すぐ候補から消え、次に宮田先生の研究室を訪ねると、先生は我々の話に耳を傾け、特にワングル発祥の地、ドイツのワングル運動に興味を示され、話をよく聞いてくれました。しかし、先生はそのあとすぐドイツ留学の予定があり、部長は引き受けていただけませんでした。

ちょうどそんな時、鈴木禄弥先生が大阪から東北大の法学部に移ってこられました。先生はまだ若く、奥さんも若く美しく、この先生なら部長を引き受けてくれるかもしれないと、早速、先生の研究室を訪ね、部長就任をお願いすると、鈴木先生は快く引き受けてくれました。また先生の研究室には、奥さんのハツヨ先生がいつも一緒におられ、禄弥先生に山行きの同行をお誘いすると、どちらかというハツヨ先生の方がいつも積極的だったように記憶しております。

【当時の活動状況（S33，34年）】 最後に、ワングル立ち上げ当時、昭和33年、34年の頃の活動状況についてお話させていただきます。私がワングルに入った昭和33年（1958年）という年は、教養学部が富沢から川内に移った最初の年でした。米軍キャンプの跡地を利用したキャンパスだったので、外目には、緑の芝生に白い建物と言った異国情緒あふれる美しい風景のキャンパスでした。しかし、教室その他の施設は、蒲鉾兵舎や木造の米軍施設を改造し、その上に白いペンキを塗った、まあそれはお粗末なものでした。

キャンパスの真ん中には、白い教会の建物が残っていて、その近くに掲示板があり、そこに“泉岳登山者募集 ワンダーフォーゲル同好会”といったワングルの同行者募集のビラが貼り出されていました。私もそのビラを見て、初めてワングルに参加しましたが、当時の活動は、こうしたビラがまず掲示板に貼られ、同好の仲間を集め、集まってきた学生と一緒に山やハイキングに行くと言ったものでした。

そのような活動が何回か繰り返されているうちに、次第に常連のメンバーが出来てき、またその常連のメンバーだけで行くということもありました。このような活動でも、泉岳をはじめ船形山、蔵王、栗駒山、岩手山といった東北のめぼしい山はほとんど登りました。

また、当時の活動の特徴のひとつに、山だけでなく、丸太沢に飯ごう炊爨に行ったり、月見ワングルといって、月を眺めながら夜を徹して何十キロも歩くとか、奥の細道紀行と称し、最上川沿いをキャンプしながら何日もかけて芭蕉の後をたどるとか、ワングル本来の“おおらかで、自由に、山野を駆けめぐり、自然に親しみ、自然を楽しむ”というものがありました。

また、当時は、まだ食料事情が良くなく、三陸海岸をキャンプした時は、一日二食の食事に、空っ腹で食べた飯ごうの飯のうまさは、今でも忘れられません。今の飽食の時代の若い人には想像し難いと思いますが、ジュースと言えば粉末ジュースが開発された頃で、その粉末ジュースを水に溶いて美味しく飲んだ思い出も、今なおはっきり記憶に残っています。

その後、2期の多田さんたち後輩が入ってきて、ワングルの活動も次第に体育部の活動になっていきました。

現在のワングルの活動は、体育部の部として、合宿、訓練、冬山といった非常に厳しい活動になっていると聞いております。私は、そのことをとやかく言うつもりは全くありませんが、ただ、ワングル立ち上げ当時の活動が、“ワンダーフォーゲル、渡り鳥、名前のように、おおらかで、自由に山野を駆け巡り、本当に自然に親しみ、自然を楽しんだものだった”という事を、皆さんの記憶の片隅にとどめていただければ、非常にうれしく思います

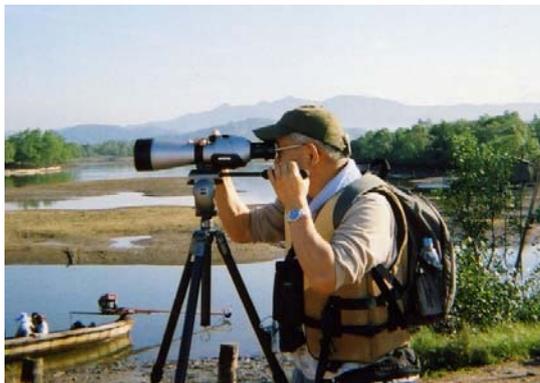
鳥と川と森

2期（昭和38年卒）多田 恒雄

1963年3月卒業以来、茨城県日立市に生活の根拠をおいています。日立製作所で、製鉄機械を製造し、客先で据付試運転まで纏める仕事をしていました。世界を相手にしての仕事で、オーストラリア、スペイン、ブラジルなどに合計7年近く滞在しました。いろいろの苦労がありましたが、学生時代に培ったワングル精神で乗り越えてきました。

退職後は、「野鳥」「河川」「森林」の3本柱で自然環境の中にどっぷりと浸りながら環境保護活動に取り組んでいます。環境保護は個人の力では、ほとんど何も出来ないのので、行政の力を借りるように行動しています。県の自然環境保全審議会委員、鳥獣保護員、環境省自然公園指導員など10指を超えるカタガキ（いずれも現金収入には余り関係ない）を駆使してのボランティア活動です。

「野鳥」では、日本野鳥の会茨城支部の副支部長として主に行政との渉外を担当しています。個人的には、国内は勿論、東南アジア各国、豪州、中米、北米等でバードウォッチングを楽しんでいます。



「河川」は地元の1級河川「久慈川」の流域1500平方Km（30Km×50Km）をフィールドに源流から河口まで野鳥と森林を追いかけしています。地元の「鮎川」では仲間と毎年サケの稚魚を育て、子供達と放流しています。

「森林」では住域に隣接する165 haの森林公園に「森の自然学校・助川山保全くらぶ」というNPO団体をたちあげ、理事長として森林整備ボランティア活動を実践しています。刈り払い機、チェーンソー、林内作業車などの講習も受けてプロの木樵並み？の山仕事をしています。また、茨城県森林ボランティア団体連絡協議会副会長として、これまた、結構忙しい仕事をこなしています。

「野鳥」「河川」「森林」は小中学校の総合学習やコミセンの老人学級のテーマにも取り上げられるので、月に2～3回は学校の先生やら、講演会の講師の依頼があります。

以上が私のワングル生活です。高い山に行くことはできなくとも、近隣の自然環境の中に飛び込んで行くと、結構、楽しい人生が送れると考えています。

最後になりましたが、2008年の「ワングル創部50周年記念行事」は、実に楽しい行事でした。昔の仲間と一緒に、また泉ヶ岳に登れるなんて、当日は、1日中、夢の中にいるようでした。幹事の皆さん本当にご苦勞様でした。そして有難うございました。



山のデジタル化

4期（昭和40年卒）小原 佑一

ワングル50周年のために現役時代の資料を探していたところ。8枚の大きな写真が出てきました。これは当時、ほとんど資料のなかった二口の沢や藪の尾根を歩くために購入した秘密兵器でした。太平洋戦争直後の1947年に占領軍がB29を使って測量用に撮影した空中写真（航空写真）の密着印画です。【写真1】

昭和30年後半になって一般でも購入可能になり、二口周辺の写真を手に入れました。同一飛行コースの隣り合わせた二枚の写真を自作の立体視眼鏡で覗き、尾根や沢を確認しながら、詳細が省略された当時の5万分の1の地形図を修正して山に入っていました。仙台神室の南、笹谷街道との間に入

り込んでいる仙人沢の大滝や表磐司の上を糸岳から熊の平を通って下っていく藪の稜線等複雑な地形を立体視して、行きたくなって現地を確認してしまいました。

それが今ではグーグルで簡単に衛星写真を見る事ができます。しかし、私が当時見た様なインパクトのある立体画像を見る事はできません。現在市販されている地形図の精度も2万5千分の1になって格段に上がりました。

当時、水の沸点から高度を測定する方法が知られており、時間のあるときは試みておりましたが、私が最初に手にしたデジタル登山用品は気圧を利用した高度計でした。ヒマラヤ遠征でも使われた目覚まし時計くらいの大きさでした。それが腕時計に組み込まれ、更に電子式のコンパスも組み込まれました。ただ、しんどい登りでばてた時、“高度を知って、まだこれしか登っていないのか！”と判ったときはドーッと疲れが増します。

戦前、北朝鮮の白頭山に厳冬期初登頂したパーティーは位置確認のため航海に使う六分儀を使ったそうです。今では複数の測地用の人工衛星からの電波を利用した全地球測地システム(GPS)を利用したハンディな位置確認装置が市販されています。

今夏、モンゴル西部の草原に行ってきました。その時どこで写真を撮ったか撮影位置を特定するためにカメラにGPSを付けていきました。まだ国内にはなかったので台湾製のシステムを米国のネット販売で購入して持って行きました。【写真2】



帰ってきて記録されている写真の緯度・経度データで撮影位置を確認するためグーグルマップ上で表示してみたのですが何も出てきませんでした。それもそのはず、モンゴルはほとんどが草原なので地図上では白紙のままです。国道だって地方に行けば車の轍がわずかに残されているだけです。人が定住している集落は何十キロに一つ、地図が空白なのは理解できます。グーグルの衛星写真からだと周囲の地形や轍の後から撮影位置を確認することが出来ました。撮影場所はこの衛星写真中央の北緯49°39分05秒、東経92度18分43秒でした。【写真3、4】

ワンゲル50周年記念山行の後、宮下さんに車で北泉の裏側、桑沼の先まで送ってもらい、素晴らしい樹林の氾濫原を散策しました。縄文時代、ブナの林が動物に餌を供給し、その動物を狩りすることで生活が成り立ったと、この地域を縄文の森(道)として保護しているそうです。樹林帯で見通しは利かない、デレターとして目だった高低のない地形で位置の特定が非常に難しい場所です。ワンゲルに入って最初の山行、この付近の残雪の樹林帯でルートを失い、同じ場所をぐるぐる歩き回るリングワンデリングをやって桑沼に行きつけず引き返した経験があります。今回は帰ってきて撮影した写真のGPSデータから正確な位置を特定することが出来ました。【写真5、6】

利根川の源流、水長沢の源頭近く(水鉛沢)に気になるポイントがあります。今から66年前、私が誕生する十日前にブナの木に刻まれた鉋目です。水長沢から平が岳に何度か登りましたがその度に“先輩！”といって再会を楽しんでいました。ここ何十年も行っていないのでそのブナの木はどうなってしまったか？当時GPSデータ付の写真が撮れていれば……と懐かしく古い写真を眺めています。



50年という歳月を現実と思う

7期(昭和43年卒)金子 清敏

式場で、ハツヨ先生にバナナでダイエットしたら如何と申しますと、ハツラツと健康的な体型に変わっている今、”残る20年何を食しようが毎日が元気ならいいのでは”と、無言で今更……との笑顔がご返事でした。

卒業以来、仙台へは何かにつけ100回以上は足を運びましたが、何か胸つかえる思いがあり、正1合の酒と板蕎麦で時空を埋めて最終列車に乗り込むことが度々でした。然し今回は、これが用のある最後の仙台になるのかと夕方の式典まで昔を思い起こして歩き始めました。

先ず片平へ向かい、開いていた北門学食へ訪れくラーメン¥220、カレーライス大盛¥300>安いことにびっくり。知らない学生と50年前のことを会話し、そして心満腹にして霊屋下へ向かいました。其処には、土木部学生の住む”霊屋下宿寮”がありましたが、昔に新規のスーパーに変わっていました。当時を振り返れば、木戸は壊れ、破れ障子で狸が住むような下宿でした。その住人としては5期の海老さん/瀬尾さんがおり、”どてら”で銜え煙草で焼酎を引っ掛けて麻雀しているのが普段の生活であったようです。じーとその霊屋下の河隈で当時を思い起こしていたら、ある歌がよぎって来ました。”民衆の酒、焼酎は-安くて廻りが速い……”<毎回コンパで彼らが、箒(又は1升瓶)をギターに見たて、ねじりはち巻きで、しわがれ声になるまで、どなって唄う姿が目には浮びます> X橋の赤線も焼酎の味も知らずして就職に上京して始めて、上野駅東口の立ち飲み屋で、10円玉4個重ねて1杯の焼酎を味わいました。仙台の生活は終わったのだと静かに杯を重ねて……。

霊屋下より次に向かったのは、伊達家3代の墓なる瑞鵬寺でした。下宿先が向山でしたので、時間がある時はその薄暗かった参道を下駄掃きで、カラコロンと音をたてて評定河原を経由して教養部へ通ったものでした。堂は見事に復元され、銭取る舍利に変わっていました。

小学5年の春、ソフトボールの試合に親父に買ってもらった馬皮のグローブを嵌めてセンターを守らせてもらったのですが、飛んできたセンターフライを3回共全て万歳した為、交代させられました。またその夏の夕方、母親に嘘ついて親父の自転車を借り出し、踏み台に使いビワ泥棒した際、庭向こうから、やさしい気品のある叔母さんの”あぶないですよ”の嗜める声に、「見つかった、逃げにやいかん」と、9尺の塀から下にある自転車を越そうと飛び降りようとした機敏な動作が、天は味方せず、飛び出していた釘に背中セーターが捕まり、半ひねり不成功、そのまま下にドスンと落下。左腕間接複雑骨折。10歳の坊主の頭には、痛みより治療代を心配した。その後6ヶ月間、北千住の名医名倉病院で大人3人によるマッサージ治療を受けましたが、一旦は手の平が肩についたものの、間接に骨片が邪魔して曲らないのは当たり前で、柔らかい腕を無理して曲げた荒療治でした。通院の苦しさや医師達のひそひそ話に、子供ながらよく耐えたものと思います。治療代に対する親への謝りがそう我慢させたのでしょうか。外科手術することなく今に至っています。私の脳の”覚えるという働き”は鈍足で、人の10倍を見聞き繰り返さないと覚ええない。然し、一旦覚えると記憶として長く残る。不可思議なことに4歳からの記憶は、切れ切れではあるが、その情景は未だ石に刻んだように良いことも悪いことも克明に残っています。野球場から広瀬川大橋を越して青葉城大手門に来ると、トレーナーの”ラストー”という、20人を引っ張る掛け声が脳裏にガンガン響いてきました。ひたすらに上り下りに足を働かせ、汗をかけたものでした。

式典でお会いし顔を思い出すことができた方は、殆んど東京で知り得ただけでしたが、思いがけない方にも会うことができました。自炊仲間であった猿人・守護さんとは40年振り。ヒョットしたら顔を出すかなと思った亡き北条真人さん、笹川博さん(酒井和歌子は親戚だから東京で紹介すると言って地下に潜ってしまった)にはやはり会えず、女子プロ”諸見里しのぶ”に似た、岩槻で苦労された今井和子さんとは10年ぶり2回目でした。

川内時代、後輩達に飲ませるために日当800円でよくバイトし、結果仏の御園生先生より出席足らずと留年命。一方、巡検で飲んでもその後で海賊版で学する姿に、教授より修士を薦められたのも事実でした。冬の二口渓谷で頭から落ちたことも、チムニで後輩の頭上へ落石を与え病院へ撤収したことも、小松川のアパートで、色恋で大の男を泣かせたことも、かつて栗駒でのお詫びと共に思い起こします。悪いことをしたら天罰を与えよとよく言います。部活動で公的にも私的にも悪く勝手過ぎました。恐らく私は35忌日には閻魔大王より奈落の底へ行かされるでしょう。

最近、ボランティア活動を介して、50年振りに出会った高校の部活動2年下の後輩が、”先輩、50年経っても上下差は変わらないですね”と言いました。私の中には、共に生活した、学んだ境遇の上下世代には、歳に関係なく永遠の年代差があると思っています。今度の正月には、別の部活の先輩・後輩に50年振りに会います。そんな機会が急に増えました。

ちやぶ台をかこんだ「親子」は、いつになっても「親と子」であり、その差は亡くなっても消えないものです。同じ山で育つ「あすなろう」はいつまでも「あすなろう」のままです。隣の山に行けば檜に成れるでしょうが……。式典で全体写真撮るときの寝転んでいる現役諸君が、50年前の自身の化身であり、新人コンパで酒を飲み、唄い夜を明かした思い出が沸いてきました。新鮮な思い出に感謝いたします。

鈴木祿弥先生という”山”は、大きく、そして動かなかったことを50周年の壮大な集まりに実感しました。皆様、健康であるハツヨ先生のこれから続く卒寿、そして白寿のお祝いの会で元気にお会い致しましょう。



TUWV卒業40周年OB山行第10弾 懐かしい笹谷峠を訪ねて

8期（昭和44年卒）根岸 巖

ワンゲラーとしての初舞台、踏みしめた大地、見つけた場所は思い出がいっぱい。

[参加者]

44年卒：相原夫婦と娘さん、前田夫婦、根岸夫婦、濱さん、守護さん、中里さん(8期 10人)

45年卒：伊藤夫婦、片野夫婦、富川夫婦、桃谷さん、原田さん、(9期 8人)

9月6日、蔵王ハートランドに集合、あいにく小雨が降ったり止んだり、まずは昼食、酒、漬物、から揚げ、梨といっぱい出てきて宴会が続く、天気の良いにして、動きそうにない。

相原が午前中は山の上は晴れていたという情報と、宿は3時半以降しか入れないという事で、御釜に向けて出発、もちろん車で。ハイラインの駐車上はガスで何も見えない、幸い雨が降っていないので刈田神社にお参り、しばらくして御利益があったのか、雲が切れ御釜が顔をみせた。ワンゲルの縦走で、曇交じりの強い風と雨の中で見た御釜は大きく吸い込まれそうという思い出があったが、今回は可愛らしい姿であった。神様に感謝して、今日の宿、青根温泉に下山。

旅館には、直行組の守護、中里さんが待っていた。早々に温泉に入ると、源泉掛け流しのあっちっち、水でうめて、じっと浸かって疲れを取る。食事はフォアグラ、米沢牛、松茸、岩魚、アワビ、ウニなど、旅館の印象と違い高級な品揃えでした。

このパーティは登っている時も、食事の時も、いつも誰かがしゃべっていて話題が尽きません、ですから、宴会、夜の団欒が無いなんて考えられません。最初、宿は岬々温泉にしようとしていたのですが、宴会禁止という事で青根温泉になりました。夜は、3階は我々メンバーしかいないという事で、一つの部屋に全員が集まり、酒と、つまみを持ち寄り、宴会スタート。仙台の思い出、ワンゲルに何故入ったか、・・桃谷が「下宿に前田さんが居て、そこから私の人生が狂って来た」と言えば、前田が「勝手に自分で狂っておいて、人のせいにするなど」と切り返し、掛け合い漫才が始まります。話題も次々と変わるので酔って眠たそうにしていると、突然、夫婦の馴れ初めは・・なんていう話題が降ってきます。そして、あつという間に11時を廻ってしまい、就寝。今回は小笠原が出席出来なかったため、守護と小笠原の話が聞けなかったのは残念、二人のボケとツッコミは芸の域に達していると思います。

岡崎旅館には明治時代に建てられた湯治用の宿泊施設が別棟にあり、自炊は1,900円、2食付でも3,900円と書いてあります。誰か泊って感想を報告して下さい。

9月7日、予定では蔵王熊野岳でしたが、きのう見たし、外は雨だし・・仙台在住の守護の提案で笹谷峠に決定。笹谷峠は、昔は車道など無かったが、国道が通じて山形へ抜けられ、周りの木も大きく成長しています。ハマグリ山に登頂開始、雨は小降り、最初は緩くて広い道でしたが、すぐに狭くて急な登山道に、しかも雨でつるつる、前に進めなくなり、撤退。今度は笹谷峠から南下し、雁戸山めぐりして、八丁平を有耶無耶の関跡や六地藏、尼寺跡などを見て、笹谷峠を縦走？

笹谷峠の思い出は、

何時も残雪が有り、朝夕のゲロ洗いで、沢がずっと下にあり、沢の水が手を切るように冷たかった事。

天気の悪い時、ユニフォームだけしか着させてもらえず、震えていた事、

一本の時、先輩から声を掛けられてもうなずくだけで何も答えられなかった事。

天気の良い時、雪がまぶしく、汗をかいた体に風が心地良かった事、

残雪の上をポンポンと駆け降りた時の爽快だった事。

昼になったので、山形工高の避難小屋を借りて、昼食。皆ながら、名古屋名物いろいろ、自家製ウメジュース、ドリップコーヒー、ミニラーメン、チョコレート、そして酒も出てきて宴会。一升瓶もとうとう空。

このまま別れるのでは寂しすぎるから、帰り道、うどん屋さんを見つけ食事。そしてお別れ・・・

みんなの頑張っている姿から元気ももらいました、ありがとう・・・

来年また会いましょう・・・「さようなら」。



垂直の大岩壁を登る (クライミング@ドロミテ)

8期 (昭和44年卒) 佐藤 拓哉・良子

「すご〜い」・・・ドロミテのほぼ中心に位置する小さな村、セルバ・ガルディナに降り立った時の第一声である。村のすぐ背後には垂直の岩壁が屏風のように聳えており、雨模様だったこともあり、近寄りたがいまでの迫力であった。この後も、毎日この言葉を連発することになった。

ドロミテとは、長野県に匹敵する広い山域に広がる山の総称であり、垂直の大岩壁や岩塔など石灰岩特有の山容が、「世界で最も美しい山」と言われている。ドロミテ観光の中心地「コルチナ・ダンペツォ」は、1956年の冬季オリンピックの回転競技で、トニー・ザイラーに次いで銀メダルを取ったところであり、日本にとって思い出深いところである。ドロミテの魅力の一つが、多くの峠が森林限界の上になり、草原と岩壁の美しいハーモニーとなっていることであろう。そして、そんな峠を越えていくと、魅力溢れる小さな村に出会う。セルバはそんな村の中でも特にきれいな村であり、山小屋風のホテルはもちろん、一般の家もみんな新築のようにきれいであった。

初日は、セラ山群のNo. 1 & No. 2 タワーと呼ばれる岩塔 (15ピッチ) を登った。セルバから峠まで車で30分、そこから草原を20分ほど歩くと、もう取付きである。初めてのドロミテの岩場を目の前にし、心地よい緊張感が湧いてきた。初日ということもあって比較的簡単なルートとはいえ、垂直の壁が続く岩塔のクライミングは、開放感と高度感があり、気持ちよかった。

二日目は、名峰サツルンゴのファイブフィンガーズ (13ピッチ) という岩峰に登った。ここは、峠からゴンドラに乗り、降りたところがもう取付きである。垂直の壁の登攀とトラバースを繰り返しながら登った頂上からの眺めは素晴らしいものであった。

三日目は、セラ山群の山肌に食い込むルンゼの垂直の壁 (8ピッチ) ののである。前半は急なルンゼを詰めていくだけであり、特に難しいところはなかったが、後半は一転して、垂直の壁 (写真) が続いた。石灰岩特有のゴツゴツした岩肌のため、見た目ほどは難しくはないものの、緊張の連続であった。

四日目は、コルチナに近いモンテ・ラガツォイという山の大きな西壁 (16ピッチ) を登った。道路脇に車を置いて壁を見上げた時、あまりの迫力に圧倒されてしまった。ガレ場を15分ほど登ったところから取付いた。いきなり垂直の壁である。

大きな下部岩壁を13ピッチで登ると暖傾斜帯となり、そこを15分ほど歩いて登り、上部岩壁を3ピッチで登ると、十字架の立っている頂上の脇に飛び出した。ゴンドラが通



真中がファイブフィンガーズ

じているので、頂上は多くのハイカーで賑わっていた。頂上からは、トファーナ山群の圧倒的な岩壁が目の前に広がっていた。

五日目は、モンテ・ラガツォイのファルツアレngo・トリという岩塔（9ピッチ）を登った。コルチナに近いいためか、これまでと違って数パーティが入っていたので、急遽ルートを変えて、空いているルートに登った。登り切ったところで急に雨が降ってきたので、急いで懸垂下降し、岩陰で雨宿りしてから、濡れたルンゼを歩いて下った。

一昨年のオーストラリア、昨年のシャモニーに続いて、今年のドロミテも天候に恵まれた5日間であった。そして、うわさに違わぬ美しい山であった。



セラ山群の垂直の岩壁

今年も無事終了・落ち葉集め&忘年会

20期（昭和56年卒）佐々木 晃

ここ数年、ささき農園の恒例イベントとなっている「落ち葉集め」。忘年会も兼ねて、12月6日に実施しました。参加者は、小山さん（19期）、岩屋、史朗、本郷、私（以上20期）、石井、千田（以上21期）、石川（22期）の8名。小山さんは5日まではベトナム、8日からは中国へ出張という過密日程の中、わざわざこのために帰国しての参加（深謝）、史朗と本郷は初参加です。前日は寒冷前線が日本列島を通過し、関東地方は冬の嵐。当日は真冬の寒さと強風が予想されていましたが、快晴無風の絶好の落ち葉集め日和になりました。筑波山の麓にある我が家の周囲いたるところに散っている駄落ち葉には目もくれず、日本3名園のひとつである水戸偕楽園の高級落ち葉を集めます。この落ち葉でないと、ささき農園の野菜の味は出せません。岩屋のわがままで、午前11時集合という百姓仕事にあるまじきのんびりスタートでしたが、8人もいるので実働3時間足らずで2tトラック満載、重さにして約1tの落ち葉をゲット。集めた落ち葉は、踏み込み温床（説明省略。調べてください）の材料になります。帰宅後、温泉で汗を流してから忘年会。秋田在住の環貫（20期）、かつては主力メンバーだったが、現在は広島に単身赴任中の富士原（21期）からそれぞれ銘酒2升、22期の芹澤からは大量のドリンクの差し入れが届き、本場・常磐物の鮫鱈鍋を囲んで、過日の50周年パーティの話題などで盛り上がりました。我が家では手狭なので、車で10分ほどの蕎麦屋の離れを借りましたが、車で帰宅しなければならない家内は一緒に飲めなかったのが不満で、「来年はやはり我が家でやろう、ただし全員シュラフ泊でお願いね」と言っていますので、参加される方はそのつもりでいてください。



黒部源流をたっぷり遊ぶ

21期（昭和57年卒）千田 敏之

●ピークを踏まない通好みのルート

毎年夏の間だけ沢登りを楽しむ21期、22期パーティーは、2004年に引き続き北アルプス・黒部源流の沢歩き山行を行った。その前のプレは、宮城・大行沢、奥多摩・川苔谷などを廻行した。

さて、前回の4年前は、赤木沢を廻行しきって尾根に上がり、黒部五郎から水晶、湯俣という超ハードなスケジュールであったので、今年は黒部を満喫するために、ピークを全く踏まない通好みのルートを組んだ。

ちなみに、私（千田、21期）は1980年のTUWV夏合宿で今回も同行した石川（22期）、手塚（22期）らと立石からの奥の廊下を廻行している。その時、高天原温泉に入ったのだが、高天原温泉の28年ぶりの再訪も今山行の一つの目的であった。

●秘密のテン場で岩魚釣り

メンバーはPL千田（21期）のほか、富士原（21期）、石井（21期）、土屋（22期、現TUWV副部長）、石川（22期）、手塚（22期）の6人。7/31の夜行「北陸」富山に向かう。8/1早朝に富山着。赴任地の広島から既に富山に先着していた富士原と合流、折立行き急行バスに乗る。

折立から太郎平小屋までは4年前は皆バタバタであったが、今年は涼しく楽勝。4時間ほどで到着しL。その後、薬師沢を目指して尾根を下る。40分ほどで沢に出て薬師沢小屋に向かうが、我々はテント持参、薬師沢小屋は幕営禁止ということで、いつもの薬師沢右俣・左俣出合い近くの「秘密のテン場」（2張はれます）に向かう。

ここは薬師沢小屋手前1時間ほどの地点から登山道を外れて薬師沢に下りたところにある。テン場の目の前で岩魚が釣れるまさに別天地。15年ほど前に私（千田）が見つけた以降、利用させてもらっている。この日も全員で20匹余りの岩魚を釣り、「やっぱり黒部だね」と言いながら皆で酒を酌み交わした。

●赤木沢出合で流しソーメン

翌日（8/2）は一旦登山道に戻り、薬師沢小屋までまず下りる。ここから黒部源流に入る。源流一帯は幕営禁止なので、小屋の従業員による源流に入ろうとする人間のチェックが意外と厳しい。我々はウサギ平か祖父平の幕営を予定しているのだが、小屋の従業員から「どこまで行くの？」と聞かれた場合の答えを事前に用意していた。案の定呼び止められたが、富士原が「赤木沢を登り切ります」とさらっと答えて事なきを得る。

この日はまさに黒部日和とも言える最高の天気、快適な沢歩きを堪能した。赤木沢出合で流しソーメンのL。手塚が考案した、「タマネギ入れの網」に茹で上がったソーメンを入れ、流水で冷やす方法が大成功。皆の賞賛を浴びる。その後は千田は岩魚止めプールで岩魚釣り（10匹爆釣）、その他は赤木沢廻行（大滝手前までピストン）と分かれる。

2時間後再び赤木沢出合で合流し、廻行を再開、祖父平まで行き幕営。

●パーティー分裂

翌日（8/3）はパーティーが分裂した。翌日から仕事の富士原と、懸案の西鎌尾根から槍ヶ岳を目指したい手塚の2人が5時に出発、源流廻行に向かった。2人は双六小屋まで一緒に行き、富士



原は新穂高温泉に下山、手塚はその後、槍、穂高の縦走を完遂して8/4に無事下山した。なお、源流は雪渓が残っていていやらしいところもあったようだ。

さて残された4人は祖父沢を遡行、雲ノ平に上がりテントを張って空身で高天原温泉に向かった。露天風呂につかり、女性レンジャーの裸もチラリと楽しんで、再び雲ノ平のテン場に戻ったのだが、さすがに10時間近くの行動時間に疲れ果てて、酒もあまり飲まずに眠った。

●嵐の中の下山、そして……

最終日(8/4)はあいにくの悪天であった。雨の中、雲ノ平から三俣蓮華、双六と縦走、その後、新穂高温泉に下山した。この日もやはり10時間近くの行動時間、それも嵐の中とあって、精神的にも肉体的にもきつい1日であった。温泉を楽しんだ後、タクシーでそのまま松本へ。松本で反省会をし、土屋は長野新幹線と東北新幹線を乗り継いで帰仙、千田、石井、石川はあずさで帰京した。

なお、あずさ号組は大雨で中央線が止まってしまい、結局4時間遅れ、八王子着が0時半、立川着が0時40分。JRにタクシーを手配してもらったものの、家に着いたのは全員2時、3時であった。前日雲ノ平のテン場の起床が4時なので、なんと23時間行動という悲惨な1日となった。

それぞれが、それぞれの黒部と北アルプスを楽しんだ今回の山行。30年近い山の付き合いがあったからこそ完遂できた計画だったと言えるかもしれない。しかし、われわれもそろそろ50代。連日の10時間行動はそろそろ見直さないと……。



I GURUST パーティー 3Pre八ヶ岳縦走 【2008年7月19日(土)～21日(月)】

4 3期(平成16年卒)金谷健史・山下絢子、4 4期(略)佐藤出・吉村雄祐、4 5期(略)平田弘一郎

1日目：晴れ

10:05茅野駅集合。久々の再会を味わう暇も無く、登山口へのバスに乗り込む。バスの混み方が三連休を物語る。樹林帯の登りでは、お互いの近況報告や、ワンゲル面子の噂話に花を咲かせながら、俺らも大人になったなぁと感慨にふける男子たち。東天狗岳への登りは案外きつく、トップの吉村はバテバテに。ピークからは、八ヶ岳主峰の赤岳や、南アルプスの北岳・甲斐駒・仙丈・鳳凰三山が見え、テンション上がる。本日のオーレン小屋は沢沿いにあり、水がジャバジャバ、またトイレも綺麗と申し分なし。トイレの建物の中には風呂場あり。一人1000円はちと高いが…。この日は、吉村の隠しぼっか「こだまスイカ」が登場するも、山下から「出すの早くなーい？」と厳しい突込みが。だって…。スイカやビールをギンギンに冷やし、山で飲む酒はやっぱ最高～。

2日目：晴れのち曇り

3時起きの4:50発。主稜線の夏沢峠から南ヤツの稜線歩き開始。八ヶ岳の稜線は、コマクサ等の高山植物が豊富で、あちこちに重そうな一眼レフを手にしたパー子。うちのパーティにも、お一人ほど…。赤岳には10:00着。狭いピークに、人が大勢でアレだけど、1時間半ほど一本。この頃には、雲が出て、時折視界が開ける感じに。本日のキレット小屋までは急斜&ガレの下り。疲れる。キレット小屋は前夜と一転、トイレは汚い、水はチョロチョロ。でも、小屋付近には珍しい白いコマクサが、そして今度は金谷が隠しぼっかの「こだまスイカ」を！吉村は一日目のテン場で、先輩金谷に気を使われてしまったのだから、この借りは剣で返すしかない、という状況に…。

3日目：晴れ

ご来光を見ようと、2:30起き。ヘッドンつけて、4時発。見晴らしの良いポコで、しばし待機。この日も稜線の両サイドが雲海と、申し分の無いベストコンディション。ご来光は赤岳の右脇から。眩しい！と一瞬逡巡したあと、昇ったんだと気づく。あとは瞬間に昇っていく太陽。ここから権現岳までのルート上に20mを超えるであろう長い垂直の梯子&鎖が付けられた岩場の登りが。特に梯子は、登ってる途中に上を見上げると「まだ残りあんなにあるのか！」との思いが、しんどい。途中の梯子の固定具が抜けているのも冷汗もの。岩場の登りを終え、人心地つくと、あとはすぐピーク。ここで、本日初の南アルプス。前日までの姿と比べて、近い！という印象。また、北ア、乗鞍、中アetc、日本の屋根らが雲海に浮かぶ姿を一望するのは格別。これがあるから、正直色々辛い&面倒くさいことの多い山登りも、やめられないんだらうな。最後の網笠山ピークも絶景ポイントで、最後のLとする。御岳、中ア、乗鞍、更に、北アに目を凝らすと、雪を残した立山らしきゴツキ山が。夏合宿への情熱が粛々と燃えたぎり、踏破を誓う。網笠山からは、南アルプスを正面に見ながらの樹林帯の下り。いつの間にか、雲海の下へもぐっていき、下界は曇りなんだなあと、優越感に浸りながら、10:20 観音平グリーンロッジにゴール！お疲れ様でした。(文責：吉村雄祐)



I GURUST 柴崎芳太郎を追って(2008/8/8~8/13)

4 3 期(平成16年卒)金谷 健史・山下 絢子、4 4 期(略)吉村 雄祐

2007年の夏合宿は南ア蝙蝠岳を目指した。山嫌いの女子大生を山の虜にしたという蝙蝠岳、その伝説どおり大きな満足を得た山行となった。ならば今年は北アだろう！ということで、来年映画が公開され、公開後には相当な反響で混雑が予想される(?)山、剣岳を先取りして目指すことにした。

気合は十分、三回のプレを行った。1プレ、甲武信ヶ岳。雪が残る極寒の頃、澄み切った空気の下に見える富士山は屈指の風格を見せた。2プレ、苗場山。梅雨時期でも楽しめるはずの高層湿原は雪に埋もれたまま全容を見せず、不明瞭で頼りない登山道は急斜面で思いのほか我々に試練を与えた。3プレ、八ヶ岳。夏の気配を感じる晴天と高山植物の花盛り、麗らかな北部と対照的に不安定な足場、急峻な山容の権現岳は来る剣岳への闘志をかき立てた。かくして夏合宿への準備は整った。

関東前夜発、翌日折立入山というハードスケジュールで始まった夏合宿。睡眠不足でバテまくるも、志気だけ高く持てたのは、わざわざ夏合宿のために発注したお揃いTシャツのお陰かもしれない。初日から天気が安定していたため、背面には北ア南部の穂高や槍、向かう先には剣岳や後立山が常に見渡せる。ここまで好条件で長期山行ができるのは去年の蝙蝠に次いで二度目だろうか。ずっと眺めていても山は何も変わらないのに、なぜか飽きない。まさに絶勝。しかし、こんな素晴らしい環境が整った中であっても世間には水を差すヤツがいる。とあるピークで場にそぐわない言葉が耳に付いた。

「槍が超丸見えなんだけどお〜!」「ほら、丸見えだよ、丸見え!」・・・『丸見え』ってオイ、品が無いなあ。何処のどいつだ?!とと思って周りを見渡すと、その言葉はつい隣で休む婦女子から発せられていた。しかも同パーティーの。・・・これには他人のフリを決め込むしかなかった。

山行中、話題には事欠かない。学生時代の話、職場の話、ワンゲル部員の話、登山哲学の話、行きたい山の話、そして色恋の話。年頃を迎えた我々が一番時間を割く内容は決まっている。どうやって口説くか、どんな家庭を作るか、確かな相手もいないのに、わずかな希望の光を強い期待の元に根限り増幅させる。あまりにテンション高くディスカッションし過ぎて、後続の老夫婦が苦笑いしている

のを見逃さなかった。

剣岳を目指す当日。この日に限っては皆口数が少なく、緊張しているようだった。それもそうだ、弘法大師が草鞋千足を費やしても登れなかったといわれるほど険しい山なのだから。ピークまでの道中、確かに滑るとまっ逆さまな箇所が多く何度と無く肝を冷やしたが、整備がしっかりされていること、天気の良いこともあり何とか剣岳三角点に到着できた。三等三角点に。100年前、前人未踏だったこの山に初めて登った柴崎芳太郎と同じ景色を見ているんだなあ、と思うと感慨深く強い風もどこか心地よく感じられた。

この夏合宿につき、プレへの参戦やTシャツの枚数を多くするために嫌々買って下さった皆様、中川さん(41期)、熊野さん(42期)、村上(43期)、佐藤(44期)、平田・長井・雨宮(45期)、阿部(46期)、渋谷(47期)に感謝致します。ありがとうございました。来年の夏は・・・穂高かな。



祝！？ 秋の縦走好きの集い 5周年

45期（平成18年卒）佐藤 賢一

今年めでたく50周年を迎えたTUWV…。そんな偉大で輝かしい歴史にはまだまだ遠く及ばないものの、私個人の中でTUWVのちょうど10分の1にあたる「5周年」という一つの節目を迎えた山行があるので、ここで簡単に報告と紹介（宣伝？）をしたいと思います。

「秋の縦走好きの集い」…いつからか自然と自分の中でそんな名前がついた山行ですが、元々のコンセプトは、3～4日の学祭期間や連休を利用して、1泊2日のプレやフリーでは行けない山域に行こうというものです。この5年で行った山と一緒に登ってくれた仲間を以下に列挙します。

04年11月	火打岳・妙高山	【44期：吉村 47期：鹿嶋、蔵本】
05年9月	南八甲田	【43期：山下 44期：吉村 45期：平田 46期：阿部】
06年11月	武尊山（群馬）	【47期：鹿嶋、蔵本】
07年11月	三岩岳（福島）	【43期：山下 46期：曾我 47期：鹿嶋、蔵本 50期：堀川】
08年10月	日光白根山	【46期：曾我 47期：鹿嶋、蔵本、森田】（敬称と自分省略）

肝心の山行の中身ですが、山の中ではタイムにせまられるわけでもなく、きれいに色づいた木々や山深く雄大な景色を堪能しつつ、100%出てくる隠し歩荷とサトウのご飯（パックライス）、ちょっと高級なビールなどを楽しみにしながら、秋フリーらしいのんびりとした山行をしています。

仙台でTUWVに関われるのは4年～6年間の方がほとんどだと思います。就職や進学などで居場所がバラバラになり、自然と付き合いが希薄になってしまうこともあるでしょう。また遠く離れたために、メールや電話等、面と向かって話すのに比べて感情が伝わりにくい方法でしか連絡がとれないことが、妙な誤解やちょっとしたすれ違いを生み、そのために疎遠になってしまうこともあるかもしれません。

そんな悲しい離れ離れを避けるため、毎年同じ時期に顔を合わせ、ゆったりと近況報告などしながら山を歩くことで、現役時代のような「家族のような付き合い」をずっと続けられればいいな…と思うばかりです！

最後に、この集いの完全なレギュラーである47期の鹿嶋くん、蔵本くん、私が1年生時分にPL・SLとして縦走の魅力を教えてくれた山下さん、吉村さん、そして、一緒に登ってくれた同期や後輩達に感謝したいと思います。物理的な距離に負けず、また来年みんなで集まりましょう！！



07年三岩岳山行 窓明山での一枚

さて、2009年は次の節目である10周年に向けての始めの一步…。これを読んでくれたみなさん、来年はぜひ一緒に秋の縦走を楽しみましょう！！（今考えてるのは雨飾山や高妻山、戸隠山辺りです♪）



05年南八甲田 赤沼にて



08年日光白根山 曇天でも結構見えた日光の山並

同期山行報告：二口山塊・大行沢

45期（平成18年卒）多田 忠義

遡行日 : 2008/9/14-15（一泊二日） 天気：9/14晴れ時々曇り，9/15曇りのち雨
メンバー : 42期 熊野裕介，45期 雨宮俊，45期 多田忠義，45期 浜本洋

「天国のナメ」といわれて久しい大行沢。三連休であることを利用し、社会人となった熊野，雨宮，浜本がその沢がある二口に駆け付けてくれた。小生はまだ仙台で学生なので，連休に対する特別な思い入れはない。

ワングル現役の頃，沢登りで夏合宿に挑もうとするパーティーにとって大行沢は「原点」となる。いわゆるプレ山行では最初に行くことが多く，全国的にもワングルのにも初心者が楽しめる沢，という認識だ。しかし，久しく沢道具に縁遠くなっていたせいとか，小生はF3で難儀する。

「まったりとナメを楽しみ，釣りと夜酒を楽しむ」のコンセプトの下に実施した，お気楽同期山行をここに乱筆ながら紹介したい。

9/14 前日に仙台入りしていた熊野，雨宮は多田の車で，浜本は新潟から4時間ほどかけて7時頃に大東岳登山口に集まる。久しぶりの沢道具を身にまとい，足取り軽く出発した。自らの強い希望で，F1下からは入渓せずF2上からとした。釣りをしながら遡行するためと，自らの体力や遡行能力に自信がなかったためである。

入渓して早々，淵にドボンする人続出。一回入れば体が慣れるものの，やはり冷たい。時折のぞく太陽の光がありがたく感じる。この日は大行沢を遡行したグループは少なくとも4か5グループ。故にF3では渋滞となった（写真1）。しかし，まったりペースの僕らには関係ないこと。但し，小生の登攀力の衰えには同行メンバーも苛立った事であろう。F3上にある通称「ウォーターライダー」は流木によって阻まれ，やむなく断念。その代わり「天国のナメ」で思い思いのポーズ！（写真2），さらに大行沢温泉！？（写真3）。7時半に出発したにもかかわらず，樋ノ沢避難小屋に到着したのは15時に近かった。その時点で漁獲ゼロの我がパーティーの熊野・雨宮は，ザックを小屋近くにおき，小屋の前であったいかにもやり手な釣り師の指示通り支沢を攻めた。その間に，浜本・多田は居眠り・・・もとい，エッセン準備に取りかかった。

谷底に日が届かなくなる頃，二人の釣り師はにやにやしながら帰ってきた。メンバー分の漁獲だとか。これは，親切にも支沢の穴場を教えてくれたおじさんに感謝せねば！当然，この晩の飯は焼き魚・・・と思いきや，それだけにとどまらなかった。若い世代ならわかるであろう，あの二次新のメニューをこのたび再現していた！つまり，夜はカレー，朝は麻婆茄子丼。止めどなく出てくる酒に酔

いながら、夜は更けていった。

9/15 今日には予報通り、昼前には雨である。社会人は明日のことが気になりだした事もあり、F5下から入渓し、F3上のケヤキ沢にとりつき登山道で下山することに決めた。釣りをしながら遡行し、F4では珍しく飛び込まず、思い思いの遡行であった。

下山後はお約束の磐司山荘で温泉、そしてバイトでお世話になった松美庵でそばを食し、それぞれ家路についた。あえて激しい(少なくとも自分にとっては)遡行を選択しなかった分、「天国のナメ」の良さを再認識できた遡行であった。もちろん、仲間との再会、遡行は言うまでもない。



写真1：F3下段を登る熊野



写真2：「天国のナメ」にて



写真3：お約束の「温泉修行」



写真4：晚餐は大行沢の恵みに感謝！

部歌を見直してみませんか

4期（昭和40年卒）島崎 質

放浪の唄

そん な に おま え は な ぜ な げ く
く ち ぶ え ふ い て き を は ら せ

く さ の し と ね に ね ころ ん で
う つ つ の ゆ め を み て い あ れ

わ た し の ゆ う こ と お き き あ れ
く た び れ や す め に や ま を み て

ひ と の う き よ の み え を す て
は ら が へ っ た ら ま た あ る け

これは部創立当初の部誌に掲載されていた楽譜です。現在歌い継がれているものとの相違は、3段目の初めのメロディーが異なることと4段目の繰り返しが無いことです。どちらにおいてもオリジナルの方が歌詞によくマッチしていると思いますがいかがでしょうか？

新年会のお知らせ

新年会は毎年1月の最終金曜日にいつもの所で行っています。

2009年1月30日(金) 18:30 (会費は10,000円の予定)

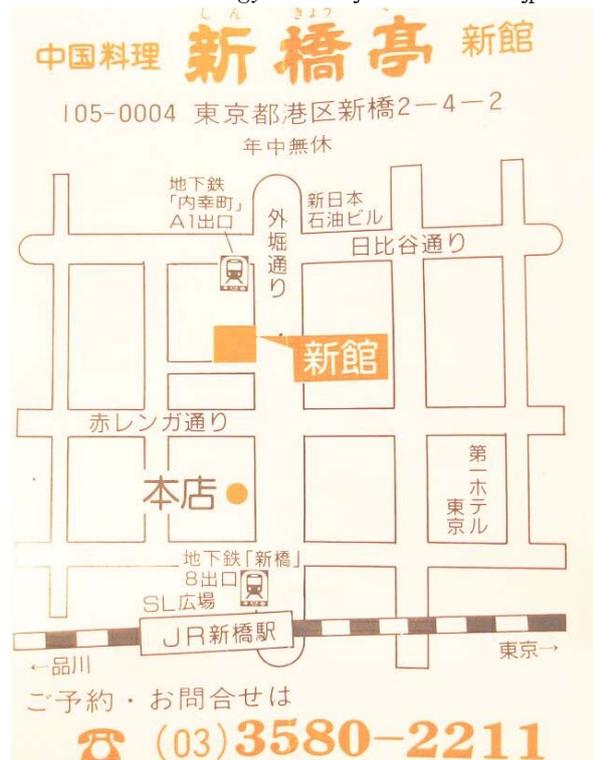
新橋駅のすぐ近くにある新橋亭(しんきょうてい)新館(TEL 03-3580-2211)に変わりました。

お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。遠くの方でも東京に出張などで来るような場合には、ぜひ出席して下さい。飛び込み大歓迎です。逆に、出席ということになっているのに欠席される方も結構います。これは本当に幹事泣かせ。予定が変わった時は早めにご連絡下さい。

連絡先 佐藤拓哉 Tel 046-841-8622 メール: taku0412.and.ogya1103@jcom.home.ne.jp

<2008年新年会出席者>

(S 3 8) 多田恒雄 (S 3 9) 小俣勝男、
岡好宗、後藤龍男、松木功 (S 4 0) 小原
佑一、平塚征英、緑川学 (S 4 1) 相沢宏
保、桜洋一郎、渋谷尚武、藤田凱巳、八木真
介、横山雄一郎、吉田公平 (S 4 2) 新井武、
加藤邦明、堤正尚、青木祐二 (S 4 3) 石川
誠之、金子清敏、藤森英和、真尾征夫、村山貞
一、上田俊郎 (S 4 4) 小笠原弘三、佐藤拓
哉、鳥山研一、根岸巖、三原健治 (S 4 5)
伊藤健一、富川正夫、桃谷尚安 (S 4 6)
薄木三生、黒田和雄、菅原英行、田中康則
(S 4 7) 池田重則、近田和人 (S 4 8)
蔭山正宏、松井一昭 (S 4 9) 岡部安水
(S 5 5) 須々木裕太 (S 6 2) 伊田浩之
以上44名



★★ 事務局 より ★★

TUWVOB会 2006年会計報告

(東京口座)

1. 収入

前回から繰越	299,303
OB会費(11人)	25,000
利息	398
計	324,701

2. 支出

会報 印刷	11,466
送料	11,430
封筒、ラベル用紙	1,486
香典(加藤忠さん)	10,000
香典(渡辺惇さん)	10,000
事務用品、通信他	618
次回繰越	279,701
計	324,701

☆ OB会員に不幸があった場合、OB会として次のように対応しています。

- ① 本人または配偶者に不幸があった場合はOB会として対応する。
- ② 葬儀に間に合う場合は同期の誰かがOB会名で生花を出す。費用は後日事務局に請求する。
- ③ 葬儀に間に合わなくて後日同期の方が線香をあげに行く場合は、OB会名の香典(本人の場合は1万円、配偶者の場合は5000円)を持って行ってもらう(事前に事務局に連絡)。費用は後日事務局に請求する。
- ④ それ以外の場合は、あまりおそくない限り事務局から香典を郵送する。

☆ 年会費は1000円です。1ページ目の口座に。